

2010年4月、公益財団法人滋賀県産業支援フサザが運営

することは単純ではない。

独立性を保持している。また、社会科学にわたる膨大な学的知見が蓄積されてきた。この成果は、滋賀のものか。否、それではないはずだ。たとえば、「街道をゆく」よろしく「流域

無謀にも「世界に雄飛する出版社をこの滋賀の地に起ち上げ」と掲げた。それから5年を経て、刊行した書籍はようやく15点。その程度の実績しかないがゆえに、これから記すことが机上の空論めいたものにならないをえないことについては、どうか寛恕いただきたい。

冒頭に書いたように、小社は幸運にも、創業時に都合3年半、公営のビジネス・インキュベーターのお世話になることができた。そのおかげで、県庁所在地の中心部にある快適なビルの中に置かれたものではあったが、文字通りの長屋のような環境の中、さまざまな分野で新しい事業を構想する仲間たちと、創業期特有の不安や希望を共有する時間を持つことができた。

だと思えば、打つ手はないのらう。さらに、私たちの知見を国内にとどめるのではなく、世界にまで広める

## 「個別」「普遍」「公共」をつなぐミッションを忘れずに

「個別」「普遍」「公共」をつなぐミッションを忘れずに

大隅書店(滋賀県大津市)代表 大隅直人氏



「ことはできないだろう。三方良しに「世界良し」を含めるとは

だろ。否、あるのではできないだろうか。出版とは、そもそも個別的な

よく知られていることだもの。普遍的、公共的なものが、近江商人の心得に「三つなぐことを使命とする営みで

方良し」というものがある。ある。このシンブルなミッションのことを想起しつつ、こんさを忘れなければ、どこを拠

こで一例として、あたかも点にしよう、われわれにでき

県下を分断しているかのよることは、まだまだ浜山あるは

そうするなかで、いくつかが学

ばせていただいたことがある。

滋賀県というところは、中央

「琵琶湖は近畿の水瓶」とい

夢です。どうかご覧いただけ

うことがよく言われる。琵琶湖

れは幸いです。以上、わたくしが見る新年の

しかし、言うまでもなく現実

は厳しい。少なくとも、小社の

現実(厳しい)それは「お前が

商売下手だからだろう」と言わ

れれば、それまでであるが)。

実際のところ、「地方で出版社

をする」ことは、困難なことだ

ある(もちろん、東京でも困難

なことと思うが)。けれども、

そもそも地方とは多様なもので

あり、「出版不毛の地」といった

ような紋切り型で語れるほど、